

とうに幾度捨てた帰還の夢なのに、ここまで来ては再び故山に帰ることのできない現実を知らされた思いだった。そして、東に位置する祖国の方向に目を落とした。そこには黒い原生林が深々とあった。その上に煌めく星を見つめ、十カ月同棲した新妻を思った。艶のよい丸顔のヨシノはどうしているだろうか？ 三年の音信不通である。それに、厳しい母の手元にある生活を考えると、実家に戻った公算が胸に広がってくる。それとも再婚しているかもしれない。帰る夢を捨てた己には無用の不安だったのに……。思いは逆に、あきらめの中から大きく膨らんでくるもののようにだった。そして、父母の安否を思い、学生の妹を思った。弟も兵隊に取られたのだろうか？

わずかの時間だったが、とめどなく望郷の思いが星座の中からわいてくるのがどうしようもなく深まってゆく。そして入ソ以来、初めて人間らしい涙を流した。

今はただ『異国の丘』に永遠に眠る六万余の若き靈に心から『靈よ安らかなれ』と祈り続けるのみである……。

合 掌

捕虜記

シベリア抑留生活一、一〇〇日

石川 中田 繁

◎…平和を祈ろう…

戦争は再び起こすまじきに

憂うべし 人類の……闘争

祈ろう 世界恒久の平和を

復員したところに、よく「異国の丘」の歌を口ずさみ、やけに体を熱くした。それは、望郷の念を募らせ、切なかつた日々を絡めて歌いつつ、しんしんと心が痛んだ。惨涙残して逝った戦友の姿が目に浮かび、臉から離れなかつた。また戦友らを残して帰還を先にした、その申し訳なきとした思いをたどるのである。手記に成し、還らざる戦友たちと収容所で過酷な労役に服したその生き地獄を書きとどめることで、シベリア抑留、

すなわち、これまさに飢餓地獄を事実と伝えたい。まさに、悪夢とするにも信じがたきであるが、よくぞ生還をなし得たりとぞ思う。

三年にわたった歲月、実に長かった。生き延びられたそれら浮浪抑留三年を、夢遊病者のようにもし、惑わした。まさに、壯人健者も魂の抜けた亡者となつてたむろした。このような姿の哀れるを両親と妻や子らが見たなら何と言う。一家の大黒柱を狂人のようにもして、嘆かわしい。四十歳ぐらいの召集兵を多くしたのである。帰還を叫び続けた執念もまことに哀れにした。悲しくもしたのであるが、過酷なまでにした。

関東軍將兵を六十万人余も留め酷使した惨忍許せざる事実として、鬼畜偽人でなくて何だろう。非人道を勝者という理由なき勝者の勝手は、人間にあらず、許すなき行為にも術をなくした。ソ連のわがままの横行は、実に情け容赦ない悪行のままにしたシベリアの収容所で、捕虜を侮辱にさらした。

昭和二十年七月二十日の召集は、全満に在住する男子のごとくをその戦力にすべて向けたのだが、必

勝我にありと信じてたどり、埋もれたのである。北安に駐屯する部隊すべてを配備、急遽の対戦に備えた戦車壕の構築に慌ただしくして、ソ連軍の進撃を迎え撃つ阻止の任務に就いた。陣地に、将も兵も夜を徹した作業に汗も滴らした。真夏日には、壕内に手ぬぐい鉢巻きをし灼熱に耐えた。時に八月十三日臨戦態勢に入つたが、決戦前夜の緊張が幕舎にみなぎり殺気立ち、明日は玉砕とも覚悟した。

心の整理に迫られて、戦友らそれぞれが私物の一切の焼却をも整えて、ますます緊迫の度が高まった。将も兵も、言いようなない感情に、死に際の様に思いを巡らせて上気した。ガーンと、頭の中を父母兄弟の顔、顔、顔がよぎり走った。頭の中が真っ白になって、体を小刻みに震わせたのである。身は撃たれ血肉も吹き飛ばか、体もろともキャタピラの下敷きになって伸びるのか、と神経質にもなった。明日の死も知れずとした思いは、血肉を固くさせ、心を上ずらせた。日暮れし丘の営舎の庭に、冷や酒飲んで大声上げ、詩を吟じ、鉢巻き姿にも「霜は軍営に満ちて」と高鳴った。

舞う將校たちが、今宵の空に抜ける、故国日本にも轟
けと声囂らした。宇宙の奥深きに星がきらめいた夜更
けにも、それはまさに「生きて汚名を残すなかれ、お
国のために散るを潔しとした軍人の自分を全うするべ
し」とも誓ったが、嵐の前のこの高台なる丘に、月が
西に傾いていた。酒宴も、今生の別れ、別離の杯を交
わす舞台に影を落としたが、酔い酒に飲むほどに舞う
れば、白刃光る日本刀が青く鋭く深夜にまで乱舞した。

十五日に敗戦の無条件降伏、詔勅を報じた。それは
まさに覆耳に水であった。青天の霹靂というのだろう
か、信じられなかったのである。そうしたことってあ
るかいなと言ひ、将も兵も啞然としたのである。青ざ
めた將校、怒り心頭に、勇む兵らをたちまちに赤鬼の
顔のようにも変えた。「馬鹿者奴が」と怒る声も飛び、
狂わしい声を大にしたのである。陣地と構えたる戦車
壕の放棄余儀なく、將兵は引き潮のごとく駐留する本
營にと戻った。半信半疑で各部隊の將兵は直ちに帰營
したなれど、指揮命令は無統制にし、異常事態に陥っ
た。本營の棟上に輝く菊花紋章は知らずもして、金色

は強烈に目に映えて眩しくした。常には感じ得なかつた
威光がやたらに光り放つようにも見え、異常事態と
なった。ここを混沌とした状況下においた。

八月十八日には、武装解除を余儀なくもして、降伏
をたどらせもした。銃、劍、刀類の没収を命じてきた
のであったが、何をか言わんやである。決戦にと立ち
向かう決意、玉砕を心に決めた壮絶な覚悟をしたのだ
が、何が何やら、どうなったのか、何でか分からない
ままにソ連軍の嚴重な警戒下におかれてしまった。全
滿に駐留した関東軍がほとんど無力にされ、完全に武
器弾薬を接収されたのである。それこそ、あれよこれ
よと考える間も与えないほどにもした。知らずにソ連
の意図に謀られてしまった。国境を侵し、街や村を蹂
躪された。先制攻撃を狙ったのだが、してやられた。
戦争とはそういうものなのだと思います知らされし後の悔
やみに、いつの間にもやらと嚴重なる警戒下におかれて、
ずるずると引き連れられた。

白旗を揚げ、ソ連軍軍使と対峙す

ソ連軍軍使と北安方面軍の軍使の接触が始まった。

北安街の北八キロメートルあたりにある鉄道信号所に待機した。北安の部隊は、大佐に副官（小尉）通訳と下士官が二名、兵卒一名の五名が代表で、屋上に大きな白旗（降旗）を揚げて待った。

残暑厳しい秋空を仰ぎ、むなしくした、あの時に、大佐は大声で「こんな事つてあるか、馬鹿なあ」とはき捨てた。さらに次いで「世が世ならばの変わりように、これも仕方がないつ、うーん」と口を真一文字にもして目に大粒の涙を滲ませた。また、緊張の顔に頬はびくびくと痙攣もしていた。思いがけぬ敗戦の事実、北安のここ、信号所の鉄路に写した。兵の私もその中に加えられたが、衛生兵だったからだろうか、今もって不思議でならない。関東軍を自負した将兵が、ソ連軍との決戦に備えたが、交戦もせずして第二戦線での惨涙を落とした。小刻みする靴音のコトコトと、またコンクリートにがたがたさせ、苛立ちした。大佐や下士官の姿を見たが、ソ連軍使の一行が姿を見せないのので気揉みしての動作だった。『畜生つ、勝者の態度を見せ、待たせやがつて』と憤れど、むなしく時間

が過ぎ、悔しきは増すばかり。日本の軍隊ならば、確実にする時間厳守である。意志もままならず無念やせなく、気も狂わしくし、ポケットに手を、靴音をますますカタカタと競らせもした。

ようやく双眼鏡に今一粒の影が飛び込んだ。みるみるうちに大きくなってくる。まさには追い込むようにもした。フルスピードですごい唸りを立て、土ぼこりを上げ、大型のモーター車一台に黒い姿の数人である。隊長らしき一人に、士官らしい一人と兵が三人で自動小銃の銃口を向け、今にも撃つぞと構えて、それをまた、顎と頭のしゃくりの動作にもした。『ようくも待たせやがつて』と憤つても、彼らは勝者の利ともいう威圧感をぶつけた態度にもして手を上げ拳を振る。今一步のところで、まさに握り拳を痛いほど堅くした。我が方の副官がすぐに応対に立った。また『こん畜生奴、馬鹿にして』と気を揉む下士官、青ざめた鬼の怒り、また顔を真っ赤に上気した大佐は、棒立ちになつた。相手の軍使はと見れば、小柄な出立ちの、中佐だと言ひ、他の兵らはと、それはまた歳も十七く十八

歳ぐらいだろうか、だぶつき服をまとった少年兵である。しかしそれがさつそうと現れたるようにし、その動作に溢れ、多勢のようにもしたのである。『こんな畜生』であつたのも、今にして忘れぬ。腹立たしさに悔しくした。勝者の威喝に、敗者の惨めさが心を痛くしたのだ。惨敗なき降伏も残念だつたが、相手にしてやられた先負けの悔しさに地だんだを踏んだ。『ようし、今に見ろ』と睨みつけてやつたが、相手にわかるはずなく従わざるを得ず、全くこんなはずではなかつたのに、これから先どうなるのか、全くの闇だ。今は相手任せの身となつてしまい、情けない思いにやるせなかつた。故郷で父と母は安否を気づかっているだろう。また一の兄、二の兄は帰還しただろうか、ままならぬ互いの音信不通が気掛かりだつた。さらに、弟が名古屋の軍の工場におり、どうしたか、元気かなと、ふと脳裏をかすめた。軍使の私も興奮をした一日でした。

あの時あの日、昭和二十年八月十八日と、記憶が生々しいのである。耐えがたきに耐え、腹臍もちぎれ

んばかりの思いをしたのだつた。

北安方面軍の武装解除は、郊外にある飛行場にと全軍の集結を求められ、厳重な警戒におかれ、ことごとく着装する武器弾薬は取り外された。兵も将校も、銃や腰剣など、又は拳銃に刀、日本刀も外された。魂として帝國軍人の将兵が忠誠を捧げてきた銃剣は、命として大切に使つたのに、すべてソ連軍に足下にされもした。

目の前にしての仕打ちをまざまざと見せつけられ、暗たんとした。青天下にさらされたる思いに絶句、天に地に轟き届けと、声もなき無念のあえぎを苦しげにもした。心冷え気落ちの体は、夢遊病者のようにもした。一人、二人、千人の将兵がまさにここにかどわかされた。皇軍、関東軍は消えた。因果は巡るともその昔から伝えられるをふう一つと頭の中によぎらせた私は、シベリアである古老と出会い、聞かされた。老人の語りは、日露戦争に敗れ、石川県の七尾の港で捕虜の苦役に就かされたという。まさかに驚いたのであるが、六十歳以上の年ごろかと見受けられ、幸福な生活

と見るにほど遠く、日露の戦いも終わって四十年余の歳月を経た今に、なお囚人を囲う、シベリアの凍地に生涯を過ごさなければならぬとは。侘しくしてこの話は、粉雪の地上に紙面の代わりにもして能登半島の絵図をかき示しての、互いの会い語りの確認にしたのでありました。

親の因果が子に孫に、戦争という過ちを犯した悪業の報いとも思うべきか、生き証人の生の語りを聞かされようとは。悲惨事をことごとくにした事実の苦しみを訴え合ったのである。私の入ソ翌年の一月中ごろの、ハバロフスク方面のティルマという所の鉄道工事、碎石降ろし作業大隊の収容所近辺での古老との出会いはあったが、今なお私の心の中に、脳裏にとタイムスリップするのである。さらに奥地に送られ、昭和二十三年八月まで、いわれなき汚名と虜囚生活を余儀なくされた。

敗戦の嘆惜、捕虜という名の侮辱

何たる事か、悔しさに涙も出ないほどだった。帝国軍人になるための軍隊教育は、厳しい訓練に男泣きに

黙して泣いた。幾たびにもし過酷なまでの扱い、それは初年兵の一年間であつたろう。兵士として当たり前にと軍人魂を身に打ち込まれ、名誉ある銃を握り剣を取った。また、死は鴻毛の軽きを盾とした。その銃と剣を一束ねてほうりつけ、足下にするのを目の前にしようなんて、侮辱の極みであつたが、ここに捕虜というこの時点から背負う苦難の道は知るべくもなくした。白旗を立て北安の飛行場へ集められた多くの駐屯地の部隊の兵員は、数千人に及んだ。将も兵も飛行場にうごめいたのであるが、全くの丸腰にされた将と兵の姿に、忍び難くして哀れなるを見た。もつて、丸刈り青坊主の帯革（バンド）なし、服装もはだけた着物にも似ていた。

格納庫に寝食する将と兵を、扉も固く締め閉ざされ、庫外へは一步も出してもらえなかつた。冷たいコンクリートの上での生活が二十日間にも及び、また、排便の匂う悪条件にさらされもし、太陽の光を断たれ、昼も暗い生活を強いられて、半病人にされた。無口となり、目は窪んだ。青ざめた顔は生気を失い、鬱病人

にも映したのであるが、完全にソ連の行わんとする畏
だった。

シベリアへの連行の第一手段にはめる計略だが、気
力、体力落としをまずにしたのである。無抵抗にした
数千人の将と兵を、綱なしの曳行を準備し、欺瞞で一
網打尽の投網にかけた。見事にもこの計画に欺瞞し落
とされようとは思ひもよらなかつたのであつた。精神
的な打撃は大きかつた。敗軍の兵何をなすべきか、指
揮を失つて思考、具案感も術なくて、暇もあらずの混
乱だつた。

一途にしたる固い精神は、ほぐれない綾ともなつ
た。哀れなる戦禍に埋もれるは、ここに始まつた強制
収容が、徐々なるシベリアへの連行の手順でもあつた。
思いよらぬことばかりが続いた。また、戦わずして強
いられる悪戦苦闘、敗けないままの捕虜扱い、その侮
辱がじわじわと締め寄せたが、二十日の格納庫内より
解放となつてホツとした。日ソの話し合いで故国に帰
れる日も近いものとばかり思つたり、単純なる思いは
帰る日も間近いと浅はかながら思つていた。庫外にし

ばしの日は楽しみながら指示を待つたが、パンと粟粥
を食べて過ごし、気持ちの落ち着きと体調の回復の兆
しも見え、心もほぐれてきた。将兵らが千人単位に組
まれて動き出した。帰国だという。軽機銃を携えた数
人の警備兵に銃口を突きつけられ、囲まれて延々と続
いた。

警戒は厳重にしたが、日本への帰還の言葉を鵜のみ
にして、大きな隊列が一梯団、二団、三団、続々と川
の流れのようだ。歩行が五日、十日と続いた。夜明け
と同時に歩かされ、山野路が暗くなり、闇夜の中道路
も消え失せた。夜は野宿をして食事を摂つた。いまだ
果てしなき北行き道を警戒兵に脅され、小突かれたり、
小銃を空に向け実弾の発射で威嚇、歩け、早く早くと
追いまくられた。残暑の折、汗に土ぼこりの舞い上が
る中、歩きながら薪、水、野菜などを採り、野宿の準
備にと昼歩きの強行をさせられた。大陸特有の日中は
暑く夜は一遍に晩秋に、マイナスにまで下る寒気に悩
まされ、荒蕪を被つて草地に這い寝をした。一集団を
四角囲いに座らせ、さらにまた四つ角は、機関銃の銃

口を荒菰を被つて寝る集団へ向けていた。いつでも撃つぞと、嚴重な警戒の目を深夜も怠らなかつた。暴動、逃亡を警戒してか。歩き続けは二十日間の長きに及んだ。一日十キロメートルで、二百キロメートルも歩かれ、黒龍江河畔にまで引き連れられた。兵も将校も火煙と土ぼこりと強い残暑の太陽の光に灼けて、顔は真っ黒だ。白く光るのが目玉だけであるが、何かを求めて。

まさに浮浪者か、乞食か、長途の歩行と野宿で、疲労もその極に達していた。北安より黒河の街にと続いた野路、丘、そして村落の戦火の跡と、家々に人は住まず、焼け残る樹木の煙の匂いも辛かつた。戦車の蹂躪に敷かれて路端に干上がっていた犬や猫も多く、また人の死体だ。日本軍の戦車、大砲、重機関銃、砲弾の残骸も見た。まさに地獄の道だ。孫呉のあたりで、「助けてください」と哀願する女と子供に何の手も伸べられなく、不甲斐のなさに心痛んだ。

戦場跡に目を覆う。建築物は焼け、鉄道の破壊、橋が爆破されて完全に遮断である。川の幅が五百メー

ルもあつたらうと思うが、この川渡りが何と、麻袋に詰まつた大豆を水面に浸し沈め、部厚な板木を並べた架橋には全く驚いた。大豆が満州の特産とは知らぬもなしだが、幾万袋か、その数の知りようもなかつた。莫大な量である。ちよつと余談となつたが、戦争とは人の命をも軽くしてしまふことのほか、すべてに尊い犠牲があつて構わぬという非道がまかり通るのである。侵略が敗者か、勝者は正者か、その良否は、勝てば官軍であり、理の通らないのが戦争というものである。敗れた者、敗者の哀れなる犠牲は、網の見えない網罟につながれて、とぼとぼ、よぼろと興安嶺の山路を強行した。また、野宿に友を庇うこともできない。野倒れ寸前の我が身とて浮浪者、菰を被る乞食姿なり。

馬もろともに沼に横転、死す騎兵

戦いの跡の町や村落を地獄とも写し見ながら小興安嶺の裾路を行く草道は、秋草もいまだ緑を濃くして、その道行く左に、池か、いや、かなり大きい、沼だろうかと横目に見やり眺めた。その折、あつと声にならぬ驚き。馬もろともに、目を大きくひんむいた若い兵

の二人の死体に啞然たり。完全武装のまま最後まで戦ったのであろう悲壮なる姿を目撃した。銃弾に倒れたかとも想像し、山征かば海征かばが脳裏をかすめて、涙をとめどなくした。歩け、早くの怒声に追い立てられ、手を合わせ南無阿弥陀佛と呟きつゝ、後ろ髪をも引かれる思いで山の道急ぎをした。重い足をさらに重く引きずりつつ、我が子の無事な帰りを待つ親たちのふびんを思うも、この様子も知らず、見ぬままに不明となつた兵も多くしたのであろう。認識票でも取れたらばと思ひながらもいかんともしがたく、追いかけられる足の引きずりだつた。まことに申しわけなくも、捜し求めの及ばなかつたこと、お伝えできずにしたこと慚愧に堪えず、今に忘れられない。貴男らの尊い犠牲で建てられた平和、日本の礎となつたことを永久に尊くして行かねばと思う。語り伝えて、鬼神も泣く涙、何人も衿を正して冥福を祈るであらう。

御魂も安かれと思ひを馳せながら、警備兵に引き連れられた、山や川を越して来た二十日間の歩きに無残にした地獄絵図を生で見た。幻は地獄に落ちた亡者に

も似たのだ。幽霊ごとき兵らの姿が、よれよれの浮浪の群れなす梯団幾千人が、対岸の町、ソ連のブラゴエシチェンスクを遠望するアムール川の川辺に立たされた。故国日本への道歩きはほど遠くしたのであるが、今日の一步、明日の一步にと望みをかけたのも、まな板の鯉になりたくない、逃げおおせるならの強い思いが走つた。脱走などをもうろんだ者もいた。だが、大方は体力が落ちて望みもなく、乞食姿の体力の落ちとともに意志も弱くなつた。捕虜の汚名、死しても残すなかれの守りもすべて消えてしまつた。

ずるずるに連れられ北限の黒河の町にまで曳行されて来ようとは、夢にだにしなかつた。軍使の代表、寺坂大佐殿と呼んだのも懐かしく思い起こし、信号所で絶句された「うーん、世が世なれば」だつた。以来大佐の姿を見ることをできなくなったのであるが、どこへ連れられたのか、全滿各地の部隊の集結続々と相次いだ河畔で、乞食か浮浪者かとした姿の群がりと焚き火の煙の舞い上がる油の匂いに、たとえようもない風景を見た。首から下げた一升瓶、酒にあらず水である。

(黄色)濁色した水も、道の溜まり水だ。しかしまた、幸いにした日照り続きは飲み水の不足に困った。蛙の日当たりにも似たのである。しかし二十日間雨に当たらなかつたのは、道歩きには大助かり、味方してくれた天の空だった。敗残の兵と将にそも何をや語らん、言葉も失ったカナリヤだった。国境の空は木枯らし吹いて寒々と砂塵を巻き上げれば、また将と兵の菰を被る浮浪の変わり果てた姿も蕭然として見えたのである。

帰るを信じて連れられたここ満州の北端、黒河へ、黒龍江河畔にまでとつながった。術もなくして茫然と立ちすくんだ。耐えもした幻は、舌をかむこともならず運命に流されたが、それら定めに逆らうことすらできない。夢遊病者のごときと書かねばならないのである。妄想誇大を得々としなが、まさに黒龍江の河畔にたどり着いたときの感想は、もはや諦めと日々の飽きに絶望して捨てやりにもなっていたのかもしれない。金ぴかの軍章輝いた軍人たちの偉容を想起するとき、あの風姿は今いずこにと追憶するのであるが、まさに地変天動と、大きく揺れたようにも思えたのである。

一日一日が不安に怯える捕虜、この身はいつどこに連れられてか、穴を掘られ埋もることを想像もした。けだし、戦中で見る事実をも今は他事と見るべきでない、異口同音にもしたのだ。孫呉の山野に見た焼跡、死体が散る、犬猫の一匹すら見ることのない地獄の道を歩かされた。もうだめだ、今夜か、また明日かとも、頭の中いっぱい様々なる考え、歩いた。

何事もなく大河辺りに来たが、目の前に満々とした川面、そして海のように広い大河、荒波逆巻く音、ごうごうと唸った。果ては銃弾一発のもと魚の餌と放られるのかもしれない、我が血も大河の水に消ゆるの果て場をも想像した。ここまで遠来を求めたわけも知るべしだった。無賃で運んだ貴重な品、自国で使つて利こそあれ損はない、使い捨てもよい、途中で離してなるものか？であつたらう。火事場に拾つた宝物にもなつた捕虜だつたわけで、それを知らされず知らなかつたこと、まことに哀れ。ずる賢い北の熊の餌となり、シベリアに連行の渡し場にとどらせた。

この土壇場に思い巡らす心は、望みのほかにして真

つ暗だった。愕然とした。今日までは満州に、明日は異国へ捕らわれいく侘しき。遠い所へ一人旅立つようにもし、この川を渡れば二度と日本を見ることができないと、たとえようのない寂しさに心は絡んだ。気も狂わんばかりの思いで、黒河の河畔に眠れずした一夜もあつた。

南去に愁え、北に進んで憂える

心ひそかに期待した「帰還、日本」への糸が切られた。川面に映す我が姿は、後ろへ後ろへと流れて消えて行つた。北へ北へと満州を離れて行くも、吹き上げの高波とともに木の葉のごとく心が揺れ動いた。南の方を眺め、切なく北に向ける悲しみに心も打ち碎かれた。川面は、青い空に水も色濃く、天空と水面の境も見えず、水中の地獄を見るようにも、逆巻く波が寄せた。動湊の波先が白く、野獣が歯をむき出したように猛々しかった。アムール川の流れは速く、押し寄せる波も怒濤のごとく、人の声も打ち消した。水車を利用した蒸気船が筏船を曳航し大河を渡るも、幾艘にも繫いだ筏は、大波に木の葉のように今にも裏返しされそ

うになった。懸命に丸太にしがみついた。それは船酔いどころではなかった。また飛沫しぶきに濡れて冷たく、がたがた震えた。心も体も死人のごとく、人骸を乗せたごとくであつた。突然、モーターボートの音に生気が戻つたが、その唸りは大きかった。忙しげに飛沫を上げて去つて行つた。手を振り上げて声高に、あざけるにも見えて悔しかった。滔々たるアムール川の青黒い流れを放心状態で見て、この流されている筏に身を任せていた。

いつか不思議にも冷静にし、心も落ち着いた。川岸に陸揚げされて、またまた砂浜に打ち上げられた魚のように浮浪集団が侘しく佇んだ。寒風に吹かれ着衣もはたはたと黒く叩かれ、また、菰一枚に風砂を防ぎ、身を包み、焚き火を囲んだ。ここがソ連の東北端の町ブラゴエシチェンスク、ソビエト領土、アムール川の岸だった。

既に初冬に入った国境の、ひょうひょうと鳴り唸る木枯らした風が、黒い群がりの集団を無情にも襲う。大河の流れの潮吹きが顔を沃り、叩き、哀しき涙と共に

に頬を濡らした。捕らわれて喘ぎ喘ぎ来た果ては、満州の最北端に流れるアムール川の対岸、ソ連領アムール川畔に擲め立つ。心境複雑にしたが、また、何の因果か、宿命か、その禍根の限りを知らずおののいた。心に期待をしたその糸の影がだんだんと薄れ、消え行くように寂しさも味わった。昭和二十年十月のブラゴエシチェンスクの町、シベリア地方の初冬に遭遇したことが幻して追憶も新たななるも、砂上に野営し、防寒外套を被り、凌ぎ寝の野宿をした。

河畔より望んで見えるブラゴエの家々の電灯に、白雲の煙が煙突にたなびき、恋しくしたが、人は家に住まうものだ。犬は外にだ。乞食は家なきにだ。情けないことになった。さらに粉雪が舞う只中に二週余り野にさらされて体は凍えた。そして人間一人に一片の黒パンと塩味だけのスープが命をつなぐ支え、疲労も極に達した。暗雲が低くたれこめて頭上を覆い、乾いたささめ雪が真孤に飛びつき、八甲田山の兵となる。白亜の住宅が点散し、黒い空面に白銀散る紙吹雪の粉雪、鉛色の空に、また、一幅の絵画を見るごときに

もしたが、暗雲の世界を彷徨う死人の地獄靈界にいるようにも思えた。日々に気温が下がって行く中に、また流木などを集めて燃やせど、顔ばかりが熱く、背を炙れば外套やその他着衣などが焦げ焼ける。煙で咽び、目がしぶく、辛かった。さらにまた鼻汁も後を絶たず、煤けた顔は目だけ白く光っていた。このような状態でここにいつまでとどめるつもりなのか、およそ生殺しである。囲み火に当たって冷を防ぎ、暖めることで生気を戻し元気づけた。だが、冷えは体力を大きく消耗してしまふ。できるだけ暖かくし身を冷やさないことである。できる限り動かずにいることだという。幸いにもした休養にて、激しい体力の消耗をすることなく、今の時こそ延命につなげねばならんと異口同音に励まし合った。ようやくにして元気を戻せたのも、露天宿とはいえ、大きな休養にし、焚き火の暖に当たることができたからだ。囲み火を絶やさないように守った。生気が出た、おのずと生きよう、生きなけりやならんと思う目覚めにも戻ったのでした。お互いを護ろう、死んでならんと、わいてきた元氣な息吹きであった。

本当によかった、全く夢遊病者も同然であつた。

予期しない突然の環境の変化―敗戦といふことの、戦わずして捕虜と扱われ身ぐるみの武装解除は、大きな衝撃、精神的なショックだつた。

さらに、突然と落とした栄養、即ち食糧の悪事情等々に加えて、二百キロ余にわたる徒歩による強制的連行、野宿の強要が重なつた。これが敵、味方双方の戦う野戦ならともかくも、無力無抵抗にもした人質同様、女、子供、老人を痛めるにも等しいのである。非人道的なことを敢えてなしたのである。降伏を認めた、やむなくともした以上、その上に白旗を挙げた相手にまだ何を求めたのか。正道な処置をとり行えば、六十万余の人質を…、死に至らせた六万人もの犠牲者を…と思うとき、まことに遺憾に思う。待ち侘びし両親を思い、また妻たちの哀しみをどう救うのか。故郷へ帰還の夢を断たれ、いまだ異国の地に埋もれる戦友よ…と、心の中の葛藤に病む。永久に御魂の安かれと祈る。

シベリア鉄道で、イズベストコーワヤ地区へ

記憶も定かにしないが、ブラゴエシチェンスクの町

に揚げられ、数日にした河畔での野宿は怪しくしたが、貨車に乗せられて幾日だつたらうか、覚えないう長途の車中におかれたが、聞き及んだシベリア鉄道の初めて見た広軌道に、さらに五十トンともいう貨物車に驚いた。マンモス貨車に閉じ込められ、真つ暗闇の中である。だれかれの顔も見えず、声でその人を知つた。野外で過ごしたあの寒さが嘘のように思えたのである。また、疲れてよく眠つた。どこを走っているのか、この駅に着いたのかも目隠して寝続ける。三日、四日…と、その疲れの程を知つた。

ガタンときしる音で、貨車がとまつた。どこかの駅に着いたのだ。停車時間が長かつた。どうなんだ、と車中の話もぼつぼつ流れ始めた。降りろという伝えもないままに、駅と駅の距離も四〜五時間突つ走つたりした。停車時間の半日もの待たせを度々にしたが、停車中の汽車ほど嫌なものはない。気が落ち着かなかつた。また、貨車の中から一步も出さず、排泄糞も貨車の中では全くまいった。互いに話も尽き、無口の時間を退屈にした。車外の景色もすき間より眺めた。護送

車での鉄路の続く長きに、森林も果てしなく、野原に人の姿が見えやらないのに驚かずにはおられなかった。地球にこのようなところもあるのかなあと思い続けて、また数日間に及ぶ車中生活となった。最初のころの二三日間は野外の野宿から救われてありがたく思えたが、こうも長い車中生活の蠢うごめきに、退屈なものになってきた。

森林地帯を越えて、小高い丘、なだらかな山上で貨車がとまった。駅である。組木の家屋が段々に並び、工場とも見える建物に長い煙突がけむる。ゆるりと白煙となつて上昇した。家屋の屋根にも、寒空の中、白煙の立ち上る風景を見た。が、久しい風情に心もほぐれ、我に戻ることができた。駅を囲む小さな町の周辺、木材の集積場という。シベリア鉄道の続くところ、このティルマ地区を中心に丸太造りの建築物が最近建設されたようにも見え、それはまた小さな町だった。駅周辺にと集められた木材がう高く積まれていた。ここで降ろされた将兵千名の者は、この沿線で線路工事をする収容所生活が始まったが、次の収容所にと、こ

こより先にまた奥へと送られた者は、森林伐採にとのうわさだった。

収容所に入ったその夕方のことであるが、大隊本部から呼び出された。何だろうと思ひ、びくびくしながら出頭した。人事調査である。しかし私だけの一人に妙に思つた。三年間の労役を共にし、不思議にも帰国まで奥地の収容所で過酷な日々を過ごした人、隊長が同郷の人だと知つたのは、帰国の日の少し前であつた。長途の貨車から降ろされ、解放され、大きく息をすゐる間もあらず、暇も与えなかつた。言うまでもなく、待つていましたと早速使役されたのだ。夕食前にも鉄路線工事である。貨車からの碎石降ろし作業へとかり出された。使役だ、各舎から何名だと集合の指示に、スコップ、鶴嘴つるはしを担がされた。無蓋車の碎石降ろし作業が夜間にと続いた。真夜中、二度、三度と矢継ぎ早にした。まいった、寝ようと床に入ったところに「起きろ」の使役集合だ。四十分余りした荷降ろしに、暗闇の中で盲迷の手探り作業、危険が伴う碎石降ろしが事故につながつたこともあつた。「おーい」「そーれ」

「一、二、三」と、かけ声を一齐にし合図した。だが、貨車の側板に打たれ、けが人が続出、死者も出したのである。使役は捕虜に重圧を限りなきにしたが、憂慮すべきは、ソ連国の行使しようとする罫にはめられたことである。一日に十数回にも使役、一年間の間断なき重労働を強いられて、悔しくした。

夜中にマイナス四五〜六度となる低温に、防寒衣も防寒帽も冷え凍てつき、顔を埋めた。瞳も凍てつき、目もしばいた。日本軍の防寒は十分なものでなかった。防寒靴にしてもしかりだった。四〇度以下は昼もまた空気が凍った。加えて腹立ったのは、ソ連監視兵の人員点呼に及んでは、呆れたことに人数の読みを繰り返すこと何回にもした。阿呆に追われるなんて、何とも、泣くに泣かれない悔しさに涙ばかりぼろぼろと落とした。

収容所の建物、宿舍は、二段ベッドが両側に、通路真ん中に薪ストーブを置いていた。軽作業に就く兵がいて、薪を燃したり掃除をしたり留守番者であった。健康と見られた者は一人残らず作業に追われた。厳し

い労働で倒れる者、昨日は一人、今日も一人と相次ぎ、さらに餓え死に寸前にした者も多くした。作業を強いられ、それは春までも生き延びることができだろうかと不安に駆られた。捕虜に新年も旧年もあったものではない。昼夜分かたぬ碎石降ろしが強要され、休む間も与えられなかった。働かざるもの食うべからずの定め、ノルマに懸ける黒パンの争奪、戦友と相争う悲劇にもなった。二等兵はその弱者だった。階級草もない古参兵の威圧もまだあらわに、苦渋を深くした。自分を護るに喘ぐのが精いっぱい。早くこの冬を越せたらと念じた。この冬を越せば春には帰還できるというデマも出た。ソ連側のまことしやかなうそにも、それを信じたり、また、だまされた。

多くの囚人を困う怨念の二〇七収容所(1)

春がようやく訪れて若草が萌えた六月中旬に、奥地への移動をすることになった。なじんだ戦友とも離れた。また再会を話し、生きていれば会えるだろう、死んではならんと別れた。だが、この捕虜に、約束が何だと頼れるあてもなかった。互いに励まし、誓い合う

言葉の離別としたのである。

軍用のトラックに分乗させられて山道を下った。アメリカ製の自動車に乗せられ林道を走らせ、森へ、森の深きへと突っ走った。だんだんと細くなる道、道なき林を縫って三日間、気も遠くなるほどだった。果てしなく続く森林、太陽の光も全く遮り、鬱蒼とした昼なお暗い木の間を縫うように抜け走った。怪獣も飛び這う、今にも亡者も現われんか、無限の道を行く。細い道へ、次第に湿地に車は駆けた。心細くして、ぼんと叩けばこだまも深く、小さくボンと返し来る、幽霊も出るかと気を遠くした。トラックは幾棟も並ぶ古びた建造物の前にとめられた。古代人の住まうかとも思わせる苔むす家屋、丸太組みで重ね積んだ原始的建造で、無双窓であった。太陽の光も射れない室内は湿気も多く、古かびも匂い、また煤けて黒く、灯火も電気はなく、燃やした明かりである。樹脂が燃煙に煤けたのだろう、人が住める住居ではなかった。

長時間トラックに揺られて体もふらふらに、地に足が浮いていた。揺らぎ酔いにふらつき、古かびで酸っ

ぱいような嫌な匂いの舎を踏んだ。ここに、囚人も同様に扱う生活の場にと収容するのである。確実にもした不安に驚き交錯したが、車に揺られ動いた疲れに、ぶつ倒れるようにもして眠った。翌朝に舎外に出てみると、収容所とする第二〇七収容所、ラーゲルと称する大きな作業大隊を構えたる施設の建物が並ぶのを見て驚いた。広い囲みは鉄線で囲われ、その四ツ角に監視塔が建ち、夜間照明の大きなライトも備えていた。

宿舎は大きい棟が順よく幾棟も並び、食堂、炊事の棟に、パン工場、鉄工場、その他の建物が列を成す。いろいろと建てるその施設の中に、風呂場、散髪所、集会所に大きなホールなども設けられていた。数百人もの囚人を囲うことが可能なるものを整え、設置したものであろう。ここに来て知ったのであるが、十年、十五年にも及ぶ長期間の囲いに就いた囚人たちの怨念の場と聞いた。ソ連の人々が労役を強いられ、苦渋の日々をむなしくもしたのであろう、残忍なる置置場にもした。人々に犠牲を強要し、その人生をはばんだのである。囚人が悉く口閉ざされた二〇七収容所だと聞いて

たのであるが、シベリアにはまだまだ、ここかしこにあると聞いたのである。

さてはて、夢のごとく、また他人ごとならずには今ここに立ち、望み侘しく身も震わせた。怨念の場得起居しなければならぬ運命が待っているとは。過酷な日々が始まったのである。二年半の余日は苦闘の日々にして、死闘の伐採作業の重労働を強いられた。どこまで続くか、切り尽きぬ伐採、重労働の「ノルマ」、根限り、命の限り、よくぞ耐えたこの身ぞ、自力ぞ。

朝五時起床、六時食事、七時営門に集合して伐採場へと向かう。遠距離の個所へはトラックに分乗し、二人挽き鋸、斧などを腰にし、いまだ明けやらぬ夜道のようにしたところを寒空を切つて車は駆けた。さらに林道を木の間を縫うようにして現場まで歩いた。凍った体は足先まで痛くした。吐息に唾も凍らせて、しばたたく目を空虚にもしたが、零下三〇度にも低くしていた。焚き火に暖まることもできずに作業をしなければならなかった。手もかじかんで指先が痛い。二人挽き鋸も身にこたえて重かった。「おーい、もうすぐ倒れ

るぞおー」「ぎいーいっ　くうーうっ」、銀雪の散る空にこだまが広がり、深々としてあたりは異様なまでの木折れが響いた。ずっしん…大きな音響とともに大きな樫の古木が倒された。大きな樫の木が枝葉を地に叩きつけた。風圧で粉雪が宙にと舞い上がった。横なぐりに散った雪が顔をいやというほどに痛めた。身も切られたようにも感じたが、耐えに耐え、また次の木へと二人挽きを戦友と挽いた。防寒着に重くした身は、転び、また起こしてあえぎ、ソ連の警備兵に怒号され、グバイ（早く）と追い立てまわられた。ノルマを達成できなければ日暮れても帰さない。体が思うように動かない、重い防寒着に阻まれ、木枝をまたぐのも至難だった。切り倒した木を枝打ちして長さ二メートルに裁断、この丸太を縦に、また横にと交互に高積み、一メートル五十センチに積み上げた。一組が十名の班を組み、伐採、枝打ち、丸太の裁断、高積み作業を連続繰り返し返して、ノルマに追われた。

古参兵に山仕事の経験者がいたので助かった。伐採をする手順をむだなくしたので、他の班よりも苦労働

少なくした。古参上等兵は北海道の出身とかで、四十歳を超えていた。顎髭を伸ばしていた風貌は組男にも似ていたが、忘れ難い追憶である。「昼だよーっ、飯上げだ」、飯盒を持って運搬馬車へと寄り走った。飯盒蓋に三分の一ぐらいのスープ（粟粥）、黒パン百五十グラム、塩魚（ホッケ）小さい物一匹の配りをもらって、焚き火を囲み、魚を焼き、缶詰の空き缶に水を入れて魚の骨を煮出し、おつゆにアカザ草浮かし、生野菜にもした。

多くの囚人を囲う怨念の二〇七收容所（2）

雪中の林の間から仲間の金切り声の叫び、「倒れるぞー、危ないっ」、声高に飛びこだますも、瞬時に「ギー、ギャー、ギーッ」と軋む響きが稲妻のごとく空をつんざいた。巨大な古木、その年輪も読みがたく、樹皮は青黒く苔むしていた。神木を殺める伐採の悪業にもと心も痛めた。怪我人も出た、死者も出した。伐採作業に泣かされたのである。

夕闇迫るころ、ようやくノルマを完了し、收容所の営門に帰り着いた。警備兵の点呼に手間取り、門外に

立たされ足を凍りそうにした。しかし、こらえなければならなかった。四列縦隊の読み取り計算ができないのか、五列に隊列を組ませた。どちらにしても不得手だ。二度三度ならざるの点検に歯ざしりし、煮えくる腹立ちにも外は暗く、夜闇の所内を目深く覗かせた。食堂へと駆け込む者の我先にと、群衆の群がりとなった。乞食の集団にも似た姿が、血肉も涸れ目玉だけを光らせた形相で、腰に空の缶とスプーンを下げて落ち着かなかった。炊事係の一挙一動を激しい目でみつめていた。杓子の手配りに一グラムも見逃さじと秤量計に鋭く目を光らせた。国の父や母が、また妻子が見たならば何としたろうか、一家の主人が、大黒柱が哀れな姿におかれたるを。浅ましい、痛ましいかな、を覗き見た。乞食腹も一時腹とも言うたとえのように、腹が膨れるのなら何でもよかった。多くの量が欲しいのである。それこそ、一年中変わらずに高粱や粟の粥と魚や肉の薄い汁（スープ）だった。塩汁スープも一時腹と膨らませた。高粱でつくられた三百五十グラムの黒パンも主食とした。最も好んだ。

水分の多い代物だけに、手の平に一握りと残らない粉の滓の固まりであった、また、子供のおやつにも似たようなものだが、黒パンこそ頼れる主食であった。

その量、重量を秤量計に競いもしたが、酢っぱい、渋い、だが、またべたつくパンも命の糧であった。生きんとする本能は食べることが命綱、その本能が無意識にも食物を捜す、それもこれも無意識の本能に食物を捜し求める姿が、実に哀れにも犬、猫同然にもした。

人といえども畜生と同様なのだ。しかし、意識という能力が働いて行動する知恵を持つ生物であるがゆえに、またおのずからの守りに強い意識も働いた。生きようとして恥もまた外聞もなくした。だが、食べなくては生きられぬ、生きようとする行動は餓鬼道地獄だ。また食べ物と目をむき歩いた。落ちている馬糞の転がりも、じゃが薯でもあろうかと夜の便所に用足す道で拾い、宿舎で空き缶に水煮してみたところ、薯にあらず、馬の糞だった。煮くずれたる糞尿の匂うを見た。野草のアカザ草を食べもした。塩、ホッケ魚の塩出しも必要だった。凍土に捜し求めた食べ物にたまたま毒

草があつてか、下痢をし死んだ者、生きようとするも、また哀れに衰えた体は透けて見える。

血も涸れ、瘦せ体に吸血の虱も発生し、襲うた。また寝台に群がり巣くうダニの猛襲に遭い、またまた生き地獄を見た。着たきりの衣服は汗と埃、脂に汚れ、垢溜まって異様に匂わせた。異臭は虱をたからせた。

衣服には虱が蠢いた。その卵が銀粒を光らせて服の縫い目に列をなすほどにもしたのだ。前に居並ぶ戦友の服の襟首に走る虱のパレードだった。瘦せた体からしつこく血を吸う虫の、警備兵の怒声以上のしつこさに痛められた。異常発生の家ダニが寝台に散居をして、いざお休みと疲れた体を横たえてうとうと眠りに入れば痛痒く、ちくちくと刺した。腫れて赤く、痛痒くして気も狂わんばかりに苦しめられた。家ダニに寝る夜の来るのが恐ろしいぐら이었다。戦き慄えた。吸うほどの血も失せ瘦せた体に、虱や家ダニに、血を吸うのをやめて、勘弁してくれよ、許してくれてもよいものをと泣きたくもなつた。寝台に起き、松樹脂灯の明かりの下で懸命に虱潰しをした。血だらけの爪を眺め、

ああ、もつたないと嘆けども、なれども、また我いまだ死なずにいる証なるかなとこの虱の生息に安堵した。

樹脂を燃やす灯り火に舎内が煤け、炎煙がぼうぼうと上がる様相は、飢餓地獄に醜霊、骸霊も屯しているのにも相見えたのである。霊堂に揺らぐ数十の脂火、寝台の上と下に、灯は霊灯のごとくした。炎の燦る煤は、ぼうぼうと罪人の怨みにと燃え、舎外へ夜空へと消え行くが、夜が来れば収容所に地獄があらわれ、獄舎に怨みの変化が…、呪い火が…、しかしてそれは、寝台上で命つなぎ撰取る食事の場所、その灯りだった。

一日の疲れを癒やし暖を取り、食事をする一時に、寸時を安らぐ夜に、捕虜には、いわゆる煤の炎火も仏の火にも似てありがたくにもした。寝台が我が城だった。三百グラムながしの黒い高粱パンを布袋に隠し持ち、楽しみにしつかりと寝るまでの持ち遊びは、猫が鼠の貯め残しにも似て、滑稽だった。「ノルマ」で得たパンを糧とした三グラム、五グラムを作業で稼ぎ

取った。百五十グラムを競い取った。意地は汚れても生き残らねばに耐え抜き、懸けたグラムのパンに目の色を変えもした。地獄も飢餓地獄に生きた。翻弄されたシベリアに、人道にあるまじき、また許すまじきこととして、食うことの権利は獣畜、鳥、羽虫でも得られるのに、これにも劣つたは過酷の一言に尽きて、飢餓地獄を彷徨いたる。

一声の呼ぶ力も尽き果てて

虚ろな目は動物にも似て、食べ物を、何かを捜す動物的欲が貪る目玉を光らせた。犬猫の目のようにもし、寝台に座る目の先が、隣の戦友の食っている口元や手指までも「パン」をみつめていた。朝食が朝の六時だというのに食堂へ五時過ぎに最早入って、炊事場の配給窓口に首を突つ込むようにもして覗き見ていた。炊事班の動きを見つめた。腹がペコペコで寝てもいられないのである。宿舎内にはもうだれもない。目を皿のようにして、眠け目をしているどころではないのだ。食堂へと真つすぐに駆けた。

だが、戦友に「朝飯だー」と高く叫べど、答えない、

返事が無い。どうしたんだろうか、どうもおかしいぞ、二、三度呼んだが、声がない。不安が飛んだ。見れば、はや冷たくした姿と変わり果てていたのである。実に驚いた。ああつと、声も出なかった。うーん、これは何としたことかと震え、残念にも戦友が哀れに悲しくなった。耐えられなくて亡くなった戦友は、粗雑な寝台の上で灯した油脂の炎に生き延びんとしていたが、呼べど、翌朝には既に声のない姿に変わり果て、一声の呼ぶ力も失せて途絶えていた。その屍に触れ、なで、宥め、涙溢れるを抑えられなかった。屍の哀れにもと悼んでも、またまた強制作業に追われ出た。瞑目合掌するも、早々と追われた。面顔を写し見、寝台上にいる姿の戦友を臉に追いながら、冷えた野外へと足重く伐採現場に急いだ。心も散り、体も凍土に浮いた。無念だろう、帰りがかったらうと戦友をしのんだ。伐採を終え、日暮れて帰舎すれば、戦友の遺体はどこかに持ち去られ、代わりに一人の兵が虚ろに寝台上に座っていた。

日々に来る夜は、地獄の展開を見るようにして、ほ

うぼうの煤、炎の煙が渦巻いた。重い二重扉を開けると、煤煙は白煙のように蒸発し、一挙に戸外に飛ぶように昇天、消えていった。寒天の夜空には北斗七星が輝いて、手が届きそうな近くに見えて、さらに凍々と凍る地面が白く、石のように固く冷え冷えとしていた。監視塔の上から煌々とライトを扉沿いに投光させて、嚴重を極めていた。恐らくは収容者の暴動や逃亡者を嚴重に抑圧するためであつたらう。まさに牢獄舎だ。氷点下四〇度にも達した低温に体も凍った。凍てついた地面がコンクリート同様にしましたが、靴がこちこちに固い氷上を滑るようで危なかつた。

夜中に用便に起き、野外放尿排糞は、まことに不便であつた。防寒服をおろしお尻を露出しなければならず、凍傷寸前にし、お尻は痛く、凍りつくようにも感じた。肌も硬く板のように突つ張つた。ほどほどにして寝床に潜り込んだが、震えがとまらなかつた。外では板囲いの内で足す大小便の、排糞の不便を今もって忘れがたいのである。この排泄物をいつか掃除当番が順ぐりに鶴嘴で打ち起こして片づけなければならぬ

が、当たり前にしてもまた、他の人らの糞尿でもやむを得ない。自分のならまだしも、他人の水塊粉もまた散って、目や鼻、口にとじわりと融け、異臭物にほとまいった。毎回、幾度となく何の意味も益にもならない思いをした。これを最低という言葉にして、忘れぬ。

次いで、奇怪にも見たのはドイツ人兵士である。シベリアに囲われ、従属する捕虜たちの使役である。因果の巡りか、悪業の果てか、戦争の渦中に埋もらされ、禍火にもがく捕虜の犠牲にと負うたのであるが、シベリアの奥深いところ、人跡未踏の一大森林地帯のど真ん中で彼らの隊列と遭遇し、すれ違った。それは二十二年の冬だった。

さらに追憶するのだが、今日も作業場へと早朝に樹々の谷間を鋸を担ぎ斧を手によるけ歩き、うつむいてまた後ろへと身を反らすとき、前方の霧の奥深くに黒く動く人影が近づいてくるのが目に飛び込んできた。人間にしては余りに太い、もしかすると熊のように見え、黙々、ドサーツ、ドカーツと音立てて近づいた。

ああつと、瞬間にドイツ人だと感じて驚いた。それは、表現が悪いかもしれないが、大熊にも見えた。それがまた泥にまみれた黒人をも見るように、服もよれよれの姿に実に凄味も加えて、身は竦み立った。実に二メートルぐらいの背丈もある大男だった。黒々としたドイツ人兵士の集団がぐんぐんと近づいた。足音を立てずれ違い、さらに遠くにと離れていった。再び会うことがなかったが、日独軍事同盟を結んだ同友が、奇遇にもシベリアで不運に捕虜と捕虜が交差をした。事実、哀れに、皮肉にも浮浪者姿ですれ違ふとは、彼らも同じ思いを心に残したことだろうと。その彼らとは交わす言葉のできるはずもないが、言え得ない不思議な光力を感じたのを今も忘れぬ。

ソ連軍は独軍に憎悪を強くしている。ぶつけたい怒りは凄い。日本軍の捕虜と違い、はかり知れない憎しみを持つ。虐待も受けたであろう。恐らくは生きて故国に帰ることができないと思つたと思われる。そのソ連兵に今、捕らわれ囲われた独軍の兵士はまことに悪因縁の深いものがあると思う。ソ連軍もまた独軍も、

それは死闘の戦いをしたが、しかし地球上で、殺し合
つて捕らわれ、囲われを繰り返しては、何の益なくも、
恨みつらみをドイツ人の抹殺に醜悪を絡め続けた鬼畜
魔が消えない。

奇縁なり、不思議にもした出合い

その人の名は登武男、第二〇七収容所大隊長である。
天に神あり地に仏あり、人には誠あり世に情けありと
信ずるに、悲しみも喜びもすべて生くる者たちの運命
として、また、宿縁の定めと生と死を知らされること、
己に常に聞かせきた。古くより「地獄で仏」という伝
えを、現実にした。紙一重が人の運命につながること
も多く、恐らくほかの収容所に回されていたら、すれ
違いになつたであろう。奇しくも思われたのは、登
大隊長が呼んでいる、すぐ本部室まで来いと、幹候の
若い軍曹が呼びに来た。本部室で隊長の前に立つたが、
収容所には軍律も持続していたので敵しいものがあつ
た。最下位の二等兵の身が直接大隊長に呼ばれるとあ
つては緊張し、何事ならんと身が震えた。また珍しい
ことでもあつたのだが、恐る恐る隊長の前へ進み、

「〇〇隊の二等兵、中田がまいりました」と、不動の
姿勢で四五度の目礼をしながら、裁きの前に出るよう
な緊張であつた。このとき大隊長が手を差し出し、両
手をしっかりと包み込むようにして固く握られた。「私
は登というんだが、お前は中田繁というんだなあ」と
言葉を切り出されて、私は直立不動「ハイイッ」と答
えたが、隊長から何を言われるのかと、冷汗も出そう
で、固くなつた。隊長がさらに続けて「お前は、江沼
郡矢田野村の者やつてなあ。せばして、かあちゃんも
いるんて。子供はわからんのだのう、そう、お前、ど
ういうことがあるうとも矢田野村へ帰らんならんな
あ、体を大事にせな」であつた。私は大きな驚きだつ
た。何で大隊長からこのような言葉があつたのだろう
と、不思議でならなかつた。

このときからはつと我に返つたのである。それは、
今日の今まで、この日に至るまでシベリアへ送られた
心の大きな動揺に、体の疲労もあつて、自分自身に半
信半疑も重なつて、肉親を思う余裕とてなかつた。自
分の身の寸時にも耐えなければならなかつたが、今は

たと我に戻った。自分に返ったが、体じゅうの血は熱くなっていた。そうだ、日本へ帰らんならん、父母が、兄や弟が、そして妻が、もしか子がと、脳裏をかすめた。妻は満州から帰国できたかと、次々に記憶がわいた。夢から覚めたように俘虜という我が身を振り返った。ドロンとして緩んでいた乞食同様な我が姿に、心も引き締まるものが蘇った。

本部隊長室を出たその足どりは軽く舎に向かったが、帰り途中に、どうして大隊長から呼ばれたのかと気に掛かった。その後、本部室にいる下士官及川軍曹より告げられたのであった。それは、大隊長は石川県の出身者だという。山中町の人だと聞かされたのである。他の兵隊に知られてはの配慮も働いて、人知れずの面会であったことを知らされたものであったが、「全隊員、兵への平等」に沿う行動ということに、本当に喜ばしく、ありがたく思った。今になお忘れられないのである。本部で大隊長からの言葉があったときは、隊長の目の奥に窺えるものを感じた。その口元にきりっとして、「お前を帰すまで見てあげるよ」という励ま

しであった。約束してくださったのである。それが鋭いあの目つきに感じ取れたのでありました。舎に帰ればやはり軍舎の規律あり、いまだ延長線におかれ、「何のだれ二等兵はただいま本部から帰ってまいりました」と、班長殿への挙手をしての報告を厳にもしたのである。

鉄道路線工事、木材の伐採は、使役に耐えるを気力で支えて、真夏日の太陽に、寒風身を刺す動きもとまるほどの強制労働に、生きた心地もなきがごとくだった。以来一年余にわたったが、ここに来て今、収容所の炊事当番を命じられて勤務に就くことになったのでした。思ってもみない炊事の仕事に就くことになろうとは。体の疲労しきった私に一番よい仕事をとということ、登隊長が心してくださったものとも思えたのであります。私は根限り一生懸命に立ち働きました。そうしたこと、捕虜の食事の一粒は血の一滴ともなることを身にしてみても辛い経験も味わった我として、生き抜くための栄養摂取に心からなる食事となるようにするのが炊事当番に与えられたる義務としたのである。

この任務の重大なるものに精魂傾け、努めた。登隊長の趣旨にもかなうよう、その努力に相励んだのでした。宿舎（兵舎）に帰らず、日々のほとんどは炊事場に釜と共に起居をした。

朝三時ともなれば目覚める。朝食の準備に大忙しくしたことも何の辛さとも思わなく、打ち込むことに全身をなげうった。およそ、収容所の三百余名の命をつなぐ大きな使命と、どうつと心の重きを感じ取ったのである。ソ連側に、炊事場は特に清潔にと厳重注意を強いた。女医（中尉）に、検査の合格の印を取りつけることを文句なしの作業に炊きつけて、仕上げに努めた。ソ連側の所長、また関係の担当の監督の目も和らいだとも大隊本部より聞かされたのであるが、登隊長の心労は、こと炊事に、食事に、ソ連側との関係に悩まれたと思う。隊長とは、二十四年二月に再会を果たし得たのでした。

戦争が囲う不幸に引きずられて

シベリアで多くの人が収容所に囲われ、女囚人たちも集団農場で汗にまみれ土に汚れていた。多くのソ連

人女囚人の中に一人交ざり働いている朝鮮人を見て、実に驚いた。朝鮮の女一人をシベリアで、それも収容所で見るとは。ここでもまたかと、まさか夢にだにしなければたことである。何かの運命と諦めにも似た様子の彼女は、今何を考えているのだろうか、生きがいを求めているのだろうか、寂しさと、そしてかわいそうな女だなあとと思い、考えさせられた。思想犯か、また別罪で捕らわれてか、大方は戦争に連なるものだろう。人生を狂わせ多くの人を不幸にしていると思うとき、

哀れさを感じた。戦争中、収容所に女囚の多くが連れられ、肉親と裂かれ、幸福な生活も断たれて、惨めな日々を過酷に耐えノルマに追われた。戦後にしてはまだ囲われる女人、この現実を目の当たりにしたが、まことに心が痛んだのである。白系ロシア人の中に混じった黒い目と黒い髪の毛もふさふさとした黄肌の、三十歳も過ぎているのだろうか、色つぼくにも覗かれた。

見ればまた、白色人の中に黒い髪の毛、黒い瞳は不気味にも見えたのである。怖いようにも思えた。黄色人種の一人である自分もまた、白色人に怖く映ったのである。

う。黄色人の黒髪、黒い瞳が囚人の中に際立っていた。

さらに、ポーランド人や多種民族の人々の集団の多きを知り、驚愕した。ロシア人囚人もいる。その多くはポーランド人が占めていたのである。その咎は知る由もない。彼女らの言葉にいかんせんかな困惑をしたのであるが、彼女らの口々にした言葉は、日本軍が負けたなんて信じられないと詰問された。彼女らの強い口調に返す言葉がなかった。情けなかった。ヤポンスキー、ヤポンスキーと、片手を上げてなじった。実に強い口調に、答えをなくした。ドイツ軍、イタリア軍、三枢軸軍、特に日本軍の勝利を最後まで信じていたとも言い、ドイツ軍が敗れても必ず日本軍が救出してくれると、最後の勝利を待ったのだ。必ず日本軍が来ると疑わず信じた彼女たちだった。真剣なる質問に全く穴があつたら隠れたいくらいであつたが、以来数十年を経た今も脳裏に焼きついている。

彼女らに軍人が多くいたようだ。話した相手の女が日本語をしゃべることができのびびりした。また、空軍の将校もいたのであるが、日本軍への期待も

破れた。現実には捕虜の姿の日本兵を目の前にしたのである。それはまさに愕然とした様子だった。なぜ負けたかの問いに、本当にやるせない思いをした。囲われた人は、千人か、いや数万人を数えたらう。多種多様の人種が、囚人を収容したラーゲルというところで刑期の終える日まで労働を強いられた。運命に従って流される、その口々は、決められた量の食事に耐え、楽しみも失い、自由も奪われて、犬猫も同然に収容所に押し込められる、こんなことであるものかと思われなければならない。

嵐吹いた戦争、国敗れて山河あり

鬼人狂人に弄されたのであるが、戦争とはそうしたもののなか、収容所での戦友相打つの醜態をさらした臆面なき思想の戦いが続いた。それはナホトカの港にも至つたのである。自由主義とも謳い、民主主義とのスローガンの旗のもとに、死闘を展開した。つるし上げられ、みずからの命を断たされた者、まことに同友相打つの嘆かわしい悲劇を見た。戦友つて何だったのだらうか、生きんがためのすさんだ性のあらわれか、

まさに獣畜にも似たものを見せつけられた。同じように捕虜のドイツ兵はどうだったのだろうかとも思ひ、かつて見た女囚収容所での彼女らと相語らったときのこと、また、作業を終え一日の疲れも癒やすひとときをダンスに興じて踊り、限りなく歌う美しき奏でに、見ている者をホッとさせたことを思い浮かばせるのであるが、人々の逆らいもなく諦めにも似たこともまた、生きて行くことに必要なのであるうか。懸命に生き延びんとする本能、驚くばかりに強靱な執念は、まさに奇跡を迎えた。アカザ草にも救われた。三年余日もの長きに耐え、今帰還の知らせを耳にしたのである。作業も中止、早く身支度しろと警備兵に追い立てられるようにもした。鋸や斧もすつぽかし、仲間たちと別れの言葉を交わすこともせず、戦友を引き離れた。離別の手を振ることも手控えて脱兎のごとく森林を逃げ退いた。三年前、貨車の中の暗さと心の闇にもがいたが、今、貨車の闇なれども、心は明るかった。

ナホトカ港に覗かせた船体が、港の高い隠蔽から招くかのようにマストが際立った。もしかするとまた戻

されるかと不安だった。名前が呼び出され、鋼橋を駆け上がった。涙が頬に走れども、まだ許されず寂しく港上に手を振る戦友に申しわけなくと手を合わせた。船上の日の丸の旗に、おうーっと、声なき感激を口にした。そして肉親の顔を瞬時に浮かべた。異国に染めた目に映るものが祖国を見え写しにしたのだった。

船員の頭には鉢巻き、またパッチの姿、下駄その他に、懐かしく小躍った。梅干樽、タクワン桶に、信じられなかつた日本の香りを感じた。

昭和二十三年八月二十三日早朝にだれかが「見えたぞー、島だ」と高く叫んだ。点々と見えてきた島に、競って甲板に総立った。船の機械音がゴーン、ゴン、ゴオンと耳に音立ち、気ぜわしく心を掻き乱した。本土だ、本土に上陸できるぞう、祖国万歳と一斉に叫び続けた。一人として船内に入ろうとしなかつた。船が進行しているというよりも、島が、本土が迎え来るようにも目に映る錯覚に目を回した。舞鶴港の湾深く、左右に映す風景はすばらしい。濃い松の緑、黄金に稔る稲穂波、草木、すべてがコントラストされた錦絵を

見た。限りなく涙がぼろぼろと体も熱くした。抑留から解放され故国に帰ってこれた喜びに、嬉しい涙をとめどなくした。引揚船上に見える陸地に、平棧橋も溢れる人の囲みに埋まっていた。乗り移った「ランチ」の上に岸壁から流れてくる懐かしいメロディーがスピーカーを伝わった。「夕焼け小焼けで日が暮れて」「お手々つないで野道を行けば」「兎追いしあの山、小鮒釣りしかの川」の童歌に感泣した。

大人、子供の熱狂の叫び声が狂喜して、父母、妻子が迎えた。「お帰りなさい」と日の丸を振り、のぼり旗はその人の名を一際にした。DDTの白粉を頭から被せられたのが上陸の一步。お風呂にも、青畳にも、初めての赤飯、酒、魚の祝膳に、夢かとも思ったのである。兄も次兄も北支、南方から、軍工場の弟も帰った。最後の一人も今帰った。両親ともども再会をした。「今日も暮れ行く異国の丘」の歌を歌わん。

復員の手続と帰郷、我が故郷にと

戦い敗れて山河あり、故郷ありて、舞鶴の元軍港で、海軍の施設に海外からの引揚者を迎える厚生省の援護

局が置かれて、シベリアからの日本兵らの復員の手続はすべて行われ、帰郷をした。復員による希望の調査、聴取等々の手続を済ませ、約一カ月の日々の生活に構えた配給帳（味噌、米、砂糖その他の品）に、金員一千円也の支給を受け、毛布に元軍隊の夏被服、さらに下着の上下が支給された。また、ソ連服に防寒外套や水筒、飯盒を所持していたリュックサックに詰めたりした。復員者の宿舎、寮内の生活に二泊三日の夢枕とも成したのであるが、忘れもしない第一夜、お湯もたつぷりの浴槽に溢れる広々とする中での入浴を楽しんだ。命の洗濯とはこのことなり。青畳もまた日本の風情の一つ、夢にも見続けてきた日本、三年有余にして感激し、さらに肴、鯛に酒、赤飯での帰国第一夜の祝宴にほろ酔う会食は、まさに夢のごとくでした。その正夢に、自分を確かめてみしたのである。米の飯を一、一〇〇日目にして口にした感激に、アツという間の三日でした。

身も心も一遍に癒され、私たちの心に深い印象を残してくれた舞鶴であった。たくさんの人々に迎えられ

た、あのメロディーも私たちに勇気を与えた。昨日までは追われてきた日々、今日よりは新しい出発に心身も勇躍とした。再建だと、自身に叱咤をしたのだ。

時に、それは福井が大地震の被害に襲われた折だったが、高山線回りの北陸線だと知らされていたが、幸いにもそれも回復しており、北陸線回りの乗車が得られた。舞鶴を発つて、次々と戦友がそれぞれの故郷の駅に降り立って、だんだんと去っていったが、シベリアでのあの影もなき姿も、何事もなかったかに明るい笑みにし、軽い足音にもしたのである。シベリアの疲れ顔も消え、光る目の輝きがまさに生き返ったように輝いて見えた。戦友は、「さようなら、さようならあー、元気になあー、達者でいろよー」と、手を振って駅に降り、家路へと帰って行った。

戦友の下車を見送り、さらに次々に田舎の駅舎に降り立ち去る姿を、名残るかのようにも見えていたが、大ぜいの戦友も減って、自分一人が後になり、見送る者も少なくなつた。福井駅を過ぎ、牛の谷のトンネルを懐かしく通り抜けた、その間もなく石川県境には

やる心は落ち着かず、荷物を手にした。あつという間に大聖寺駅にも到着をした。わが家に…と、ますますじいっとしていられなく、座席を立ち、腰もかけていられない。ここから江沼郡に入った。二〇七收容所の大隊長が山中町の人だったことをここで思い出し、さあつと頭にひらめきが走つた。どうしていられるか、思いをさらにして、「どうぞ御無事に、また早く帰還なされますように」と祈つたのでした。

汽車が大聖寺の駅を発つて間もなく、矢田野村役場の人でした、お名前は覚えていないが、二人の方が、迎える者だと私を訪ね来たのでした。そのとき初めて、家内と子供が先に無事に帰つたと聞かされた。終戦の翌年の秋だったことも知らされた。三年もの間、互いの消息は不明におかれ、知る由もなかった。あのときの運命は共どもの別れにしたが、思えば、今は奇跡だとしても、なお両親の健在、兄や弟も復員をしているとの伝えに、今私が帰国の日の対面を心待ちしている姿を想像し、もうすぐそこに、と車中で私の足は地につかなかつた。

思えば九年目の故郷への帰還である。昭和十四年春三月国鉄粟津駅を発ち、そして再び粟津駅にと降り立ったのである。役場の方が家まで送ってくださったが、我が家の前に立って、今新しく、去りしあの日の家郷を出て発った思い出を顧みて、勇ましくまた雄々しくした決意のこと、言葉が思い出されて、勇ましくしたことなどが面映く思えてならない。苦洪に満ちた三年余の日々の回想は今走馬灯のごとく、人生の回り道をして家の玄関に帰り着いたのだった。

それは、実に回り道をたどった。肉親、親と子と引き離れ、戦争下で四人兄弟の四人ともども、辛いこともあったが生還を成すことができた。さらに両親との再会の日を迎えることができた。老いし父母の顔、兄弟に妻、子供を抱いて混乱をも潜って生き抜き帰った苦難を察して、その責めを悔い、唇を噛みこらえ、溢れ出る涙を抑えられなかった。いつまでも体が引き締められ、固くしたが、その感激を生涯、生命のある限り忘れまじぎと誓ったのである。

シベリアの地に過ごした日々を忘れない。生きてい

る限り、悔い、惜しみも、私たちが語り部として書いていくであろう。尊き日本の人柱となった御霊に対し、私たちがその現実を共にした証を明らかに語るべきを責務と考えなければ。『今日も暮れ行く異国の丘に、友よ、辛かるう、切なかるう、我慢だ、待ってろ、嵐が過ぎりや、帰る日も来る、朝が来る』、いつまでも口ずさみ歌わん、「異国の丘」の歌を。心の引き締まる思いであるが、執念の帰還！であった。そして、美しい日本の山河、故郷のありて、我が命のここにありての幸福にも会えて。

三年間の抑留生活を顧みて

岩手県 大場 正志

ソ連軍の襲撃、そして出動、武装解除、抑留

昭和二十年八月八日は雨が降っており、未明の轟音に飛び起きたが、落雷と思えば再びベッドに潜り込んだ。暫くして非常呼集のラッパで全員営庭に集合した。東